



イケケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 495 回 史実が語る「死をかけた、大平正芳の交渉」

2012.10.21

「領土問題は存在しない」と挙げた拳を降ろせなくなった野田政権、中国と膠着状態に陥り、日本経済に暗雲が漂っている。そんな中、9月30日(日)放送のNHKスペシャル「日中外交はこうして始まった」は、中々見ごたえのある内容だった。

番組は1955年、インドネシア・バンドン会議から始まる。最近公開された記録から、当時の民間の経済外交で日中をつなぎ、「LT貿易」の頭文字にもなった高碕達之助(覚書に署名した中国側代表廖承志(Liào Chéngzhì)、と日本側代表高碕達之助元通商産業大臣の頭文字であるLとT)と周恩来との秘密会談など水面下の交渉が明らかになった。バンドン会議の代表だった高碕は、米中の緊張緩和が不可欠と考えアメリカでケネディらに日中修好を訴え、1960年周恩来との会談でプラント輸出を実現させる。が、その直後アメリカからのNGを受け、貿易は中断される。アメリカにネタをばらしたのは、外務省の役人だった。中国国交の希望の火は、消えた。しかし挫けず秘密裏に交渉を繰り返しながら、希望の灯を再び燈すべき、動きは止まらなかった。番組として、その後の動きをドキュメント風に追っていく。そしていよいよ、主役は当時の総理大臣・田中角栄と外相・大平正芳、対するは、毛沢東と周恩来の登場となる。

圧巻は、1972年9月25日、田中首相、大平外相ら、国交正常化交渉のため訪中。その晩餐会の席で、田中首相の挨拶の「中国国民に多大なご迷惑をおかけした」という文言の中国の訳文が、「反省の念がまったくなく」として中国側で問題になる。

周恩来、翌日の会談で「田中首相の発言は中国人民の反感を呼ぶ」と表明。

国交樹立直前になり、調印決裂の危機に陥った。

以後、不眠不休で徹夜を繰り返す大平、1972年9月27日、大平外相、中国外相と車中で極秘会談し、日本の立場を説明。やがて、反省の念を共同声明に盛り込むことを提案。また、日本と中華民国間で締結された日華平和条約の扱いが懸案になるが、玉虫色の文言にし、日中双方で独自の解釈が成り立つようにすることで落着。尖閣諸島問題も棚上げにすることで合意する。周恩来首相の「小異を残して大同に就く」の言葉を引き出すこととなる。

その時の大平の言葉である。「国として、完全に中国の立場を受け入れることは難しすぎる。最大の譲歩はするつもり。中国に来た以上は政治生命をかけて、必要であれば肉体生命もかけてこれをやり通す」と決意を表明。政治家としてまた男として、文字通り、大平は死をかけた交渉をやり抜いていた。「政治家の秘訣は何もない。ただ“正心誠意”四文字ばかりだ」とは、幕末の勝海舟の言葉だが、当時の大平は、正にこの心境にあったに違いない。今、こんな政治家が一人もいなくなった。もし、こんな政治家が今日の日本にいれば、中国も、韓国も、アメリカですら、関係改善が早まると思う。

「政治家たれ、政治屋ども！」こんな罵声も納得してしまう、今の日本かもしれない。